

前古賀・井手口遺跡

福岡県八女市大字前古賀字井手口所在遺跡の調査報告

八女市文化財調査報告書 第64集

2001

八女市教育委員会

序

八女市の西端を南北に走る九州縦貫自動車は、九州の動脈としての役割は大きく、八女インターチェンジ付近では、八女市や筑後市の工業団地として開発が進んでいます。今回の発掘調査は九州縦貫自動車の東側に隣接して高齢者保険施設が建設されるため、建設に先立って発掘調査を実施したものです。

発掘調査にあたりまして、八女福祉会には、終始文化財保護のため御協力いただきました。心から感謝申し上げます。

平成13年3月30日

八女市教育委員会

教育長 樋口 欽一

例 言

1. 本書は八女市教育委員会が八女福祉会の委託を受けて実施した、福岡県八女市大字前古賀字井手口所在、前古賀・井手口遺跡の発掘調査報告書である。なお、井手口遺跡の名称については、昭和64年に同名の遺跡（八女市大字新庄字井手口）を調査しており、今回は区別するため大字名を前に冠した。
2. 発掘調査は八女市教育委員会が主体となり実施した。
3. 遺構の実測は参加者で行い、現場写真は赤崎が撮影した。
4. 出土した遺物の整理は岩戸山歴史資料館で行い、同館で保管している。
5. 本書の執筆、編集は赤崎が行った。

本文目次

1. はじめに	1
2. 位置と環境	2
3. 発掘調査の概要と経過	4
4. 遺構と遺物	6
5. まとめ	12

挿図目次

第1図	前古賀・井手口遺跡発掘中	1
第2図	前古賀・井手口遺跡と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	3
第3図	前古賀・井手口遺跡調査位置図 (1/5,000)	5
第4図	前古賀・井手口遺跡遺構配置図 (1/300)	7
第5図	SD01西側壁土層図 (1/40)	8
第6図	SD01土層図 (1/40)	8
第7図	SD03土層図 (1/40)	8
第8図	SD01出土土器実測図 (1/3)	10
第9図	SD01・02出土土器実測図 (1/2)	11
第10図	SD03出土須恵器・陶磁器実測図 (1/3)	11

図版目次

図版1	前古賀・井手口遺跡発掘前 (北から)
図版2	遺構面検出 (東から)
図版3	遺構掘り下げ後全景 (東から)
図版4	遺構面検出 (西から)
図版5	遺構掘り下げ後全景 (西から)
図版6	SD01全景 (北東から)
図版7	SD01全景 (南西から)
図版8	SD01南西端コーナー部分 (東から)
図版9	SD01土器出土状態
図版10	SD01土層 (北から)
図版11	SD03全景 (東から)
図版12	SD03土層 (東から)
図版13	SD01出土土器
図版14	SD01出土土器
図版15	SD01出土土器
図版16	SD01・02出土土器
図版17	SD03出土須恵器・陶磁器

1. はじめに

前古賀・井手口遺跡は福岡県八女市大字前古賀字井手口481番外6筆に所在する。

調査の発端は、社会福祉法人 八女福祉会が、老人福祉施設を建設する計画がなされたことによる。事前の協議で、当該地が平成5年から平成8年まで発掘調査を実施した八女西部地区圃場整備地の南側隣接地であるところから、遺跡の存在が考えられた。このため、平成11年12月24日付けで試掘調査届が提出され、それを受けて平成12年1月12日に試掘調査を実施した。この結果、歴史時代の溝や柱穴が発見され、建物建設予定地全体に広がっていると考えられた。このため、両者で協議を行い平成12年度事業として発掘調査を実施することとなり、平成12年3月21日付けで発掘届が提出された。しかし、農地転用の手続き等で調査開始が遅れ、ようやく、平成12年10月6日埋蔵文化財発掘整理調査委託業務契約書を締結した。

発掘調査は平成12年10月16日に開始、天候にも恵まれ平成12年12月11日に現地での調査は終了した。引き続き土器の整理等や報告書作製に着手し、平成13年3月30日に完了した。



第1図 前古賀・井手口遺跡 発掘中（東から）

調査関係者は次のとおりである

八女市大字柳島 8 6 3 番地

社会福祉法人 八女福社会

理 事 長 松 尾 麗 子

八女市教育委員会

教 育 長 樋 口 欽 一

教 育 部 長 石 松 憲 治

生涯学習課課長 諸 富 和 生

生涯学習課課長補佐 志 岐 徳

生涯学習課参事補佐
兼社会教育係長 鹿 野 耕 一

文 化 財 係 長 赤 崎 敏 男 (調査担当)

文 化 財 係 中 川 寿 賀 子

文 化 財 係 大 塚 恵 治

文 化 財 係 嘱 託 山 田 朗 子

2. 位置と環境

前古賀・井手口遺跡は八女市の西端に位置する。この付近は矢部川と室岡台地のほぼ真ん中で、江戸時代に開削された花宗川が流れている。周辺の標高は18メートル前後で、水田と畑地として利用されている。遺跡の西側は九州縦貫自動車道に隣接し、南側は花宗川を挟んで筑後市と接している。

近年この地区は昭和57年度から平成3年度まで八女南部地区圃場整備事業、平成5年度から平成8年度まで八女西部地区圃場整備事業が実施され、数多くの遺跡が発見され、調査を実施している(註1)。また、八女市、筑後市とも一帯が工業団地としての開発も進んでおり、開発に伴う発掘調査も増加している(註2)。

(註1) 「八女市南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報」八女市文化財調査報告書第18集 1989

「八女市南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報2」八女市文化財調査報告書第19集 1990

「農村活性化住環境整備事業地内(八女西部地区)埋蔵文化財調査概報1」八女市文化財調査報告書第38集 1995

「農村活性化住環境整備事業地内(八女西部地区)埋蔵文化財調査概報2」八女市文化財調査報告書第42集 1996

(註2) 「上柳遺跡」八女市文化財調査報告書第18集 1989

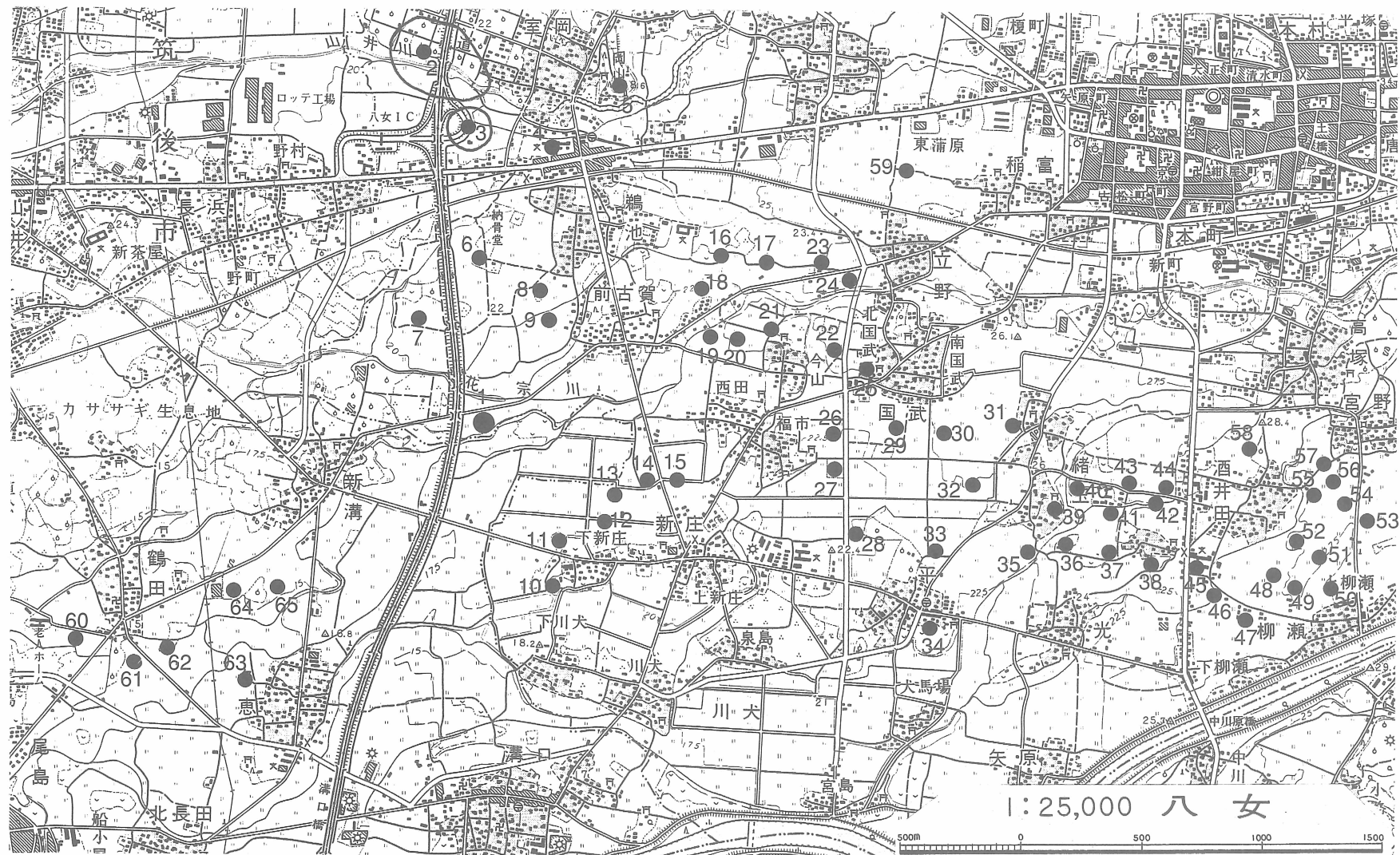
「室岡工業団地内遺跡Ⅰ」八女市文化財調査報告書第27集 1993

「室岡工業団地内遺跡Ⅱ」八女市文化財調査報告書第31集 1994

「室岡工業団地内遺跡Ⅲ」八女市文化財調査報告書第44集 1996

「広川林遺跡(2次調査)」八女市文化財調査報告書第58集 2000

「広川林遺跡(3次調査)」八女市文化財調査報告書第63集 2001



第2図 前古賀・井手口遺跡と周辺の遺跡分布図 [1/25,000]

- 1.前古賀・井手口遺跡 2.野口遺跡 3.道添遺跡 4.岡山小学校校庭遺跡 5.岡山公園古墳 6.松ノ外遺跡2次 7.廣川林遺跡2次 8.鵜池・野田遺跡 9.大西前遺跡
 10.六反田遺跡 11.ヒヤケ遺跡 12.宮ノ后遺跡 13.吉書田遺跡 14.水町遺跡 15.西田前遺跡 16.樋の口遺跡2次 17.土穴遺跡 18.五反田遺跡 19.川原遺跡
 20.井手田遺跡 21.井手口遺跡 22.篠原遺跡 23.立野・六反田遺跡 24.立野・大坪遺跡 25.松本遺跡 26.前田・大坪遺跡 27.中里遺跡 28.上島町遺跡 29.国武遺跡
 30.前田・大坪遺跡 31.袴田遺跡 32.打越遺跡 33.新替遺跡 34.平遺跡 35.宿町遺跡 36.水洗遺跡 37.宮ノ前遺跡 38.石町遺跡 39.緒玉・天満宮遺跡 40.野田遺跡
 41.二反田遺跡 42.京田遺跡 43.深田遺跡 44.京田遺跡 45.三河小学校校庭遺跡 46.国伏遺跡 47.アモメ遺跡1~3地点 48.向田遺跡 49.アモメ遺跡
 50.茶ノ木ノ本遺跡 51.長田遺跡 52.島田遺跡 53.揃町遺跡1・2区 54.松ノ本遺跡 55.長田遺跡2次1・2・3地点 56.前田遺跡2次1・2地点 57.前田遺跡1・2・3地点
 58.鳥井遺跡 59.一竿遺跡 60.鶴田岸添遺跡 61.鶴田前島遺跡 62.鶴田栖原遺跡 63.久恵野元遺跡 64.新溝松原遺跡 65.新溝丸田遺跡 (60~65 筑後市)

3. 発掘調査の概要と経過

1. 調査の概要

今回の発掘調査では、開発面積4,072㎡の内、老人福祉施設の建設によって掘削される、900㎡を対象として調査を実施した。調査は、西側の一部が畑地のほか大半が水田であったため、耕作土下までの土をバックホーで除去した後、遺構の確認を行い、その後、各遺構の掘り下げを実施した。

2. 調査経過（抜粋）

平成12年10月16日、本日より調査開始する。バックホーを入れ掘削の結果、地表下すぐに遺構が検出される。調査区中央付近から南北の小溝、東側から大溝が検出される。

10月17日、バックホーで西側の掘り下げを続ける。大溝の続きを確認するが遺物は少ない。午後3時30分から降雨。

10月18日、バックホーで西側の掘り下げを続ける。前日の雨のため清掃できず。午後から天気回復、清掃後発掘前の写真撮影を行う。器材運搬、テント設営。大溝（SD01）の一部の掘り下げを開始する。

10月24日、SD01の掘り下げを続ける。

10月27日、SD01、SD03の掘り下げを続ける。

10月31日、SD01、SD03の掘り下げを続け、SD03はほぼ掘り上がる。

11月6日、先週末の雨のため全体が水没。ポンプでくみ揚げを行う。

11月7日、前日に続き遺構内の水揚げを行う。午後ようやく水揚げ完了、溝の掘り下げを続ける。

11月12日、SD01、SD03の土層の写真撮影。SD01南西コーナー部分の掘り下げを続ける。

11月14日、SD01南西コーナー部分の掘り下げを行うが一部灰色の土が多量に堆積していたため、範囲を確認し写真撮影をする。

11月24日、全景の撮影を行う。撮影後、基準点から移動して実測の準備を行う。

11月27日、水糸を張り実測を開始する。

11月30日、遺構の実測と土層の実測を続ける。調査区の西北にSD01の延長部確認のためトレンチを設定する。

12月7日、実測を続ける。

12月8日、実測を続け、午後からレベルを図面に入れる。

12月11日、午前中レベル記入、遺構配置図作製。土層名記入し図面等の補足調査を行う。午後から器材等の後かたづけを行い現場の調査を終了する。



第3図 前古賀・井手口遺跡 調査位置図〔1/5,000〕

4. 遺構と遺物

今回の発掘調査では耕作土、床土を除いた浅い部分で遺構面が確認できた。遺構として検出されたのは溝と柱穴がわずかであり、調査の結果、調査地区や周辺は大きく削平を受けており、深く掘削された溝3条と柱穴のみがかるうじて残っていたにすぎない。

1 遺構 (第4図)

耕作土を約30cm掘り下げたところで遺構の上面が検出され、地山の粘土層を掘込んだ溝と柱穴が確認された。

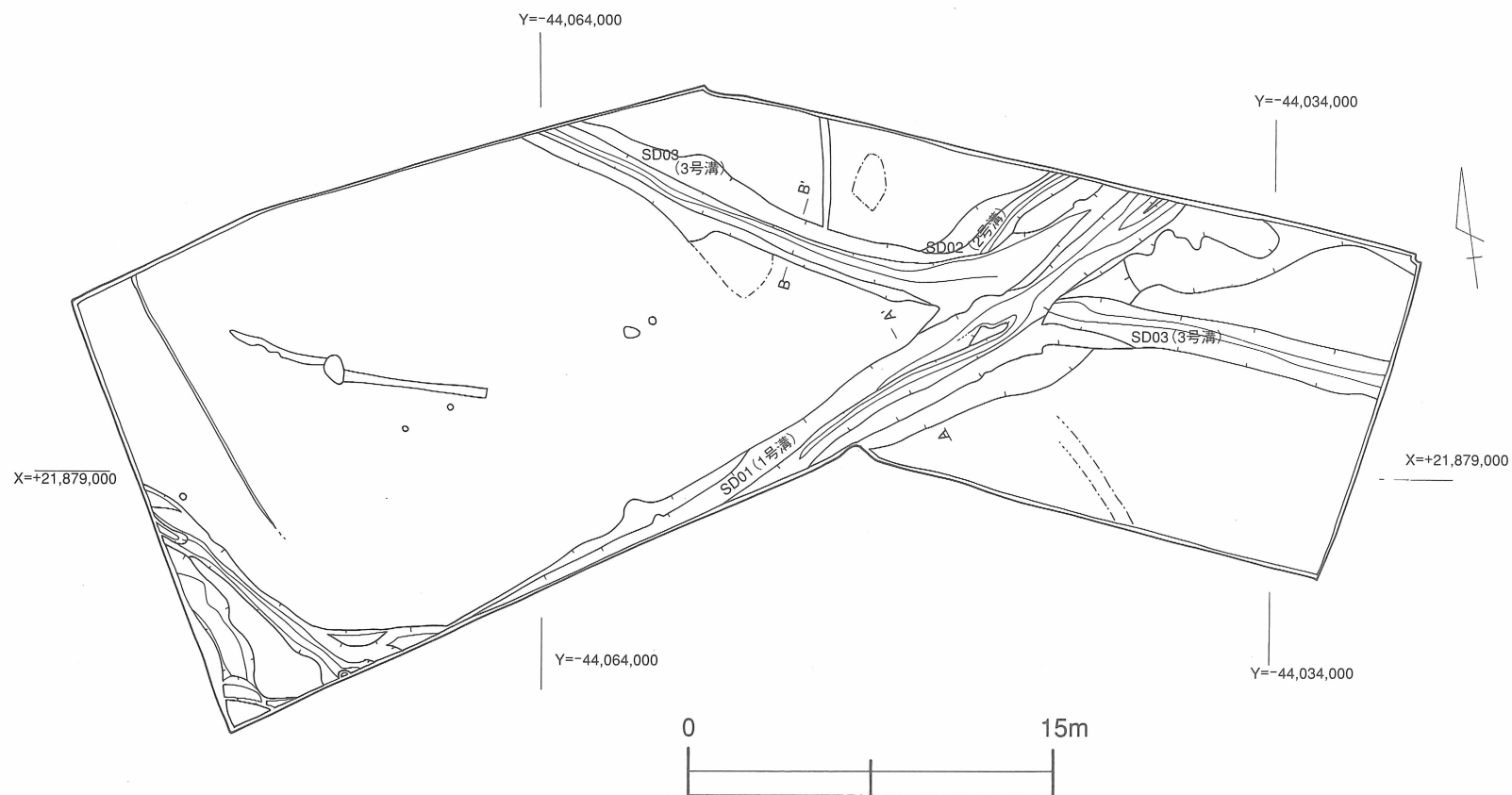
溝

SD01

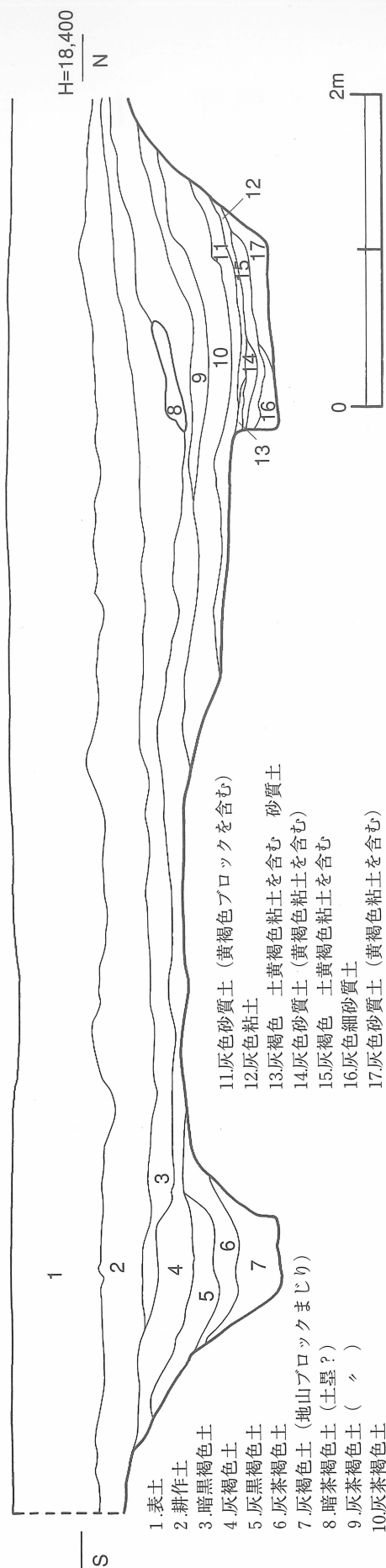
調査区の中央をほぼ北東-南西方向に延びる溝で、SD03を切っている。北東側での上端幅4.3m~6.0m、下端幅1.5m~2.1m、残存する深さ0.7m~0.8m、南西側は全体を検出していないため溝中央で上端幅4.0m~3.3m、下端幅1.5m~2.0m、残存する深さ0.6m~0.85mの溝を検出した。溝は調査区の南西端から北西方向へほぼ直角に曲がり、曲がって11mについて確認している。また、直角部分の内側の立ち上がりは約50度、外側の立ち上がりはやや緩く約35度となっている。溝底中央には上端幅0.55m~1.0m、深さ0.15m~0.3mの小溝があり溝全体に延びている。南西角付近は溝底の小溝は2条となる。また、南西角付近には大溝から外に延びる小溝が分かれており、排水用の溝とも考えられる。溝底面はわずかに凹凸があるがほぼ平坦で、北東、南西側の高低差が0.10m~0.20mとほとんど無く、排水を目的とした溝とは考え難い。溝内の土層を見ると、上層から暗茶灰色土、暗灰褐色土、茶褐色土、暗茶褐色粘土、黄褐色土、鉄分や地山の粘土を含んだ黄褐色土と堆積しており、溝全体についてはほぼ同じ堆積状態である。ただ、内側の立ち上がり部分に暗灰色土が内側から流れ込んだ状態で検出され、また、南西角付近は厚い灰褐色土の層が溝中程に広範囲に広がっていた。このため、内側から多量の土が流れ込んだものと思われる。溝底付近には鉄分が多く沈着しているため、溝が長期間使用されていたものと考えられる。遺物としては非常に少なく、上層では須恵器、土師器の小片が、溝底から土師器の破片が出土した。

SD02

調査区の中央でSD01とほぼ並行しているが、調査区の中央で北西に大きく曲がり、SD03を切ってSD03の埋土中を北西方向延びる溝で、北東側で上端幅0.6m~0.9m、下端幅0.2m~0.4m、残存する深さ25cm前後、北西側に曲がったのは中程の土層観察から見ると、上端幅1.15m、下端幅0.6m、残存する深さ0.35mで北西側が広くなる。溝両側の立ち上がりは緩い。底面はわずかに凹凸がある



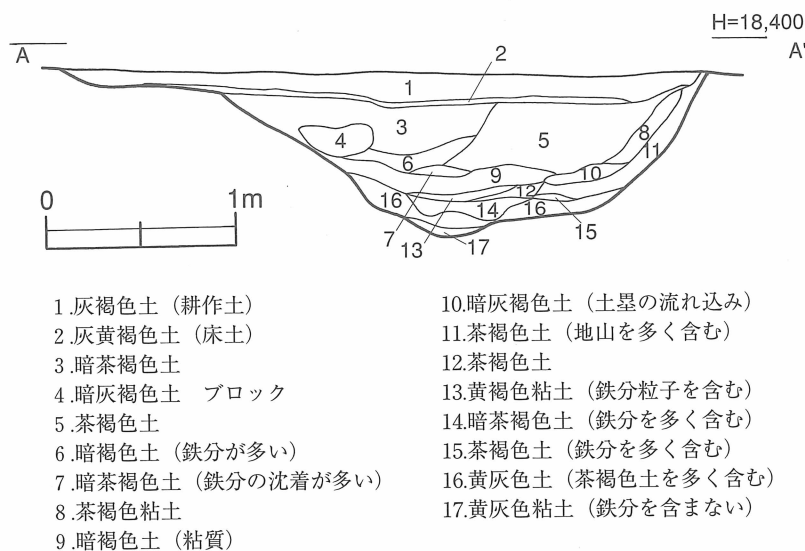
第4図 前古賀・井手口遺跡 遺構配置図〔1/300〕



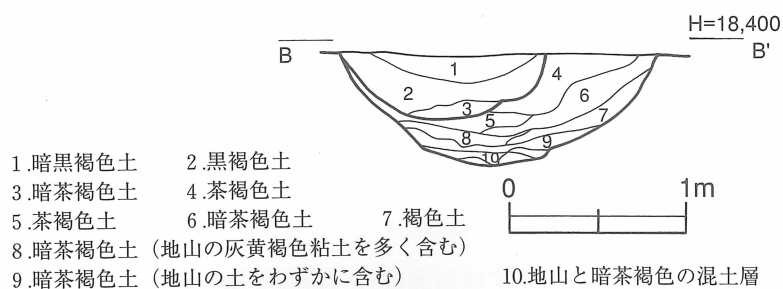
第5図 SD01 (1号溝) 西側壁土層図 [1/40]

SD03

調査区の中央をほぼ北西-南東方向に直線に延びる溝で、SD01、SD02によって切られている。北西側で上端幅1.8m~2.0m、下端幅0.2m~0.4m、残存する深さ0.7m~0.8m、南東側で上端幅1.6m~1.8m、下端幅0.25m~0.6m、残存する深さ0.6m~0.65mをはかる。溝は調査区の南東端から北西方向へ、70mについて確認している。また、内外ともに立ち上がりは緩く、約20度から約30度となっている。溝底は狭くほぼ平坦であるが、北西側と南東側の高低差が10cmあり北西側がわずかに低くなっている。溝内の土層を見ると、上層から暗茶褐色土、暗灰褐色土、茶褐色土、暗茶褐色粘土、黄褐色土、鉄分や地山の粘土を含んだ黄褐色土と堆積しており、溝全体についてはほぼ同じ状態である。ただ、内側の立ち上がり部分に暗灰色土が内側から流れ込んだ状態で検出され、また、南西角付近は厚い灰褐色土の層が溝中程に広範囲に広がっていた。このため、内側から多量の土が流れ込んだものと思われる、溝底付近には鉄分が多く沈着しているため、溝が長期間使用されていたものと考えられる。遺物としては非常に少なく上層では須恵器、土師器の小片が、溝底から土師器の小破片がわずかに出土した。



第6図 SD01 (1号溝) 土層図 [1/40]



第7図 SD03 (3号溝) 土層図 [1/40]

2 遺物（第8図～第10図）

SD01、SD02、SD03から弥生時代・古墳時代・歴史時代の遺物が出土しているが、量的には非常に少ない。

SD01

弥生時代の遺物

弥生式土器（第8図） 碗、高杯、甕が出土しているがいずれも小片である。

碗（5） 復元口径は12.8cm、口縁部は緩やかに直立し、底部は丸みを持っている。外面調整は不明で、内面はヘラ調整が行われている。

高杯（8） 短脚の高杯と思われ、杯部と脚部の接合部分の破片で接合部が明瞭に残る。外面接合部はなで調整。

甕（10、11、14、15、16・17） 甕は2つに区分できる。

1類（11、14、15） 口縁部が「く」の字に折れ外方に開く。口縁端部はやや角張り、胴部は余り張らない。口縁部は磨滅して調整があまりわからないが、刷毛目調整がわずかに残る。胴部外面は刷毛目調整、内面は荒い刷毛目調整。

2類（10、16・17） 口縁部はほぼ直立し、胴部も膨らみを持つ。外面は縦方向の刷毛目調整で、10は口縁部内側に横方向の荒い刷毛目調整を施す。

石器（第9図） 黒曜石とサヌカイトがあり、いずれも剥片である。

黒曜石（1、3、4）

サヌカイト（6－9）

古墳時代の遺物

土師器（第8図） 碗、甕が出土しているがいずれも小片である。

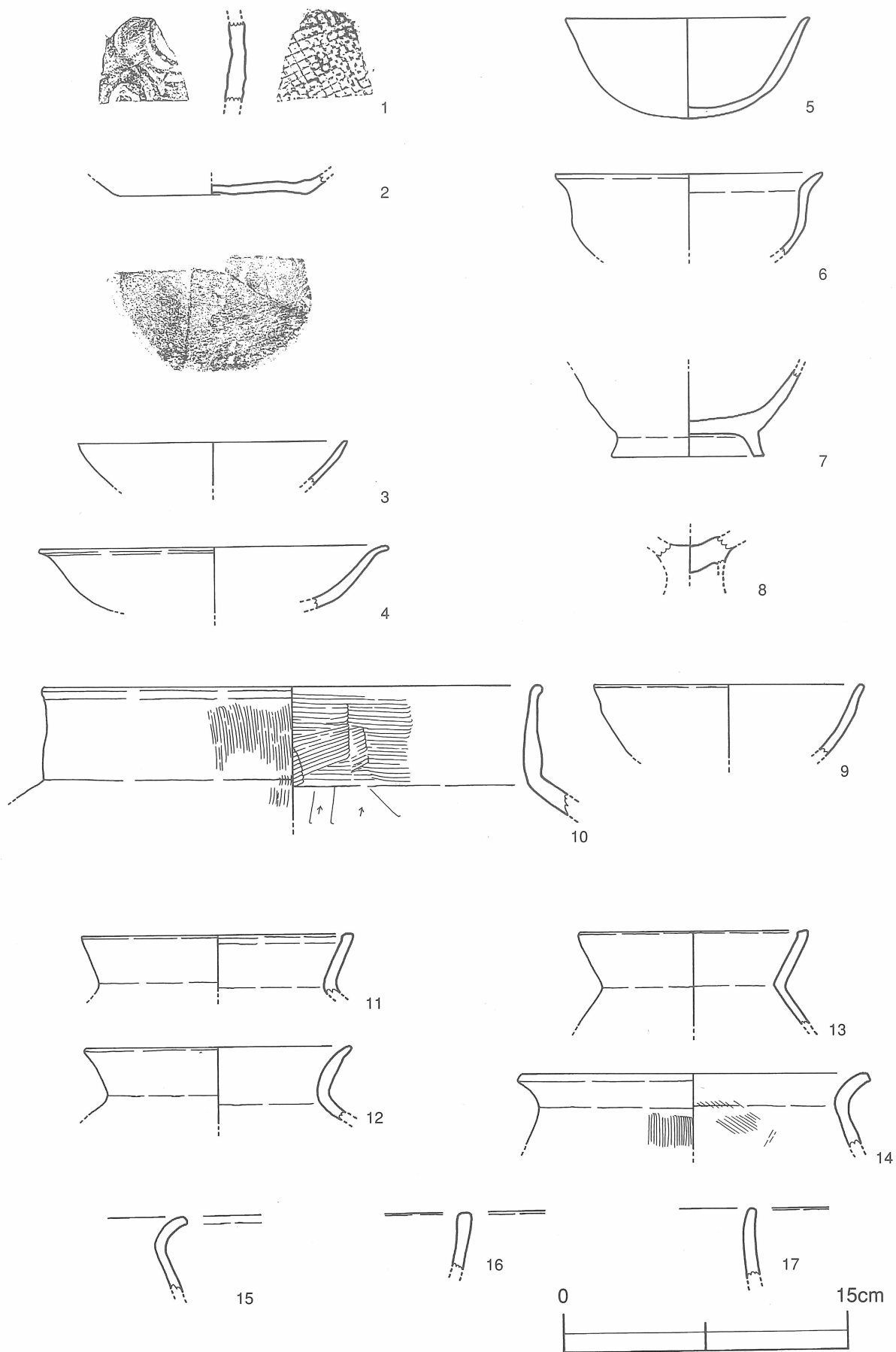
甕（13） 復元口径は11.8cm、口縁部が「く」の字に折れ上方に開き、口縁端部はやや角張り口縁部は外方に折れる。内外面とも調整は磨滅のため不明である。

歴史時代の遺物

須恵器（第8図） 甕が1点出土しているが小片である。

甕（1） 胴部の破片で、外面は格子目タタキが深く残っている。内面は粗い青海波状文が残る。焼成は良く青灰色を呈する。

土師器（第8図） 皿・杯・碗、甕が出土しているが、小片が多い。



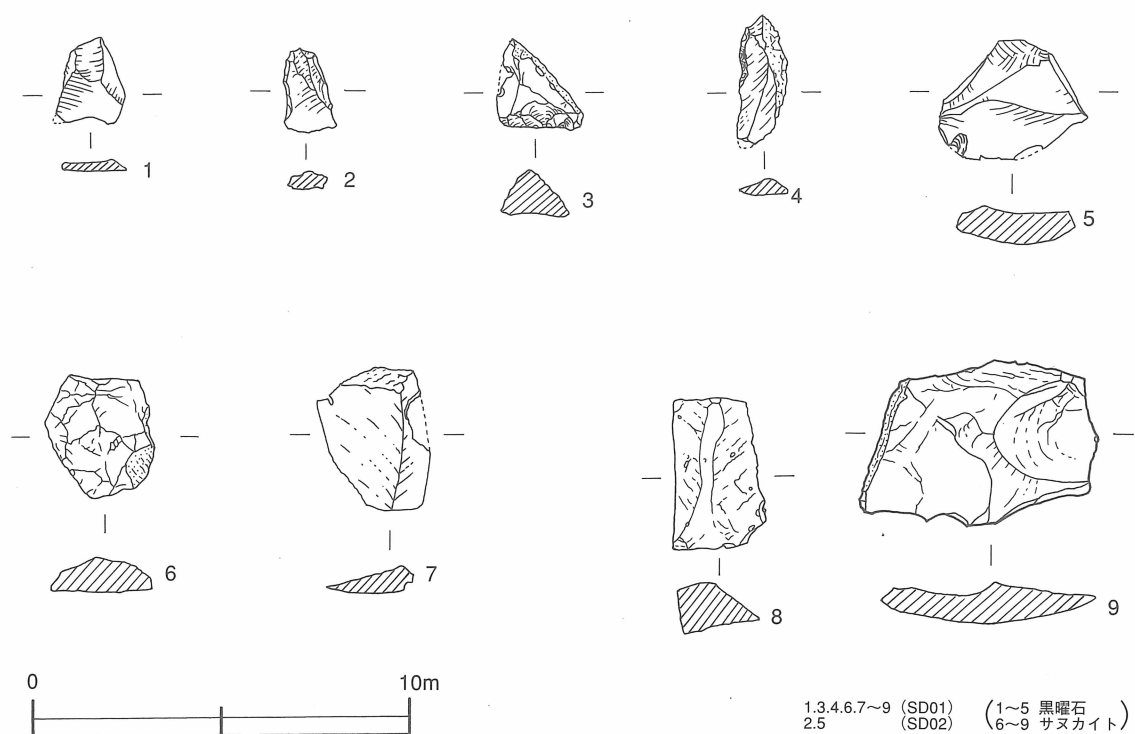
第8図 SD01 (1号溝) 出土土器実測図 [1/3]

皿（2）底部の1／2程が残っており、浅い皿と思われる。底部の径は9.8cmで、高さは不明である。内外面の調整は磨滅のため不明であるが、底部は糸切り離しと思われる痕跡がかすかに残っている。わずかに砂を含むが良質の胎土で、焼成はあまり良くない。

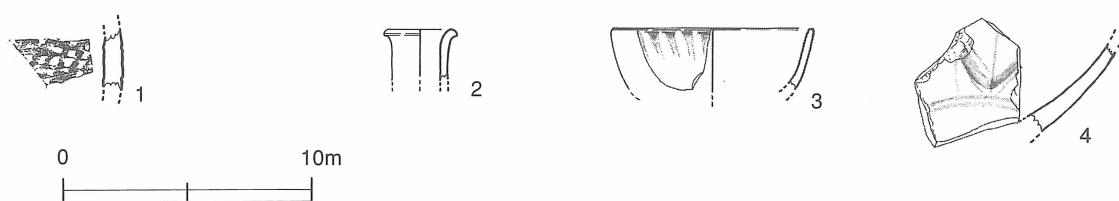
杯（3・4）6は復元口径は約14cm、高さは不明である。内外面の調整は磨滅のため不明である。わずかに細砂を含むが良質の胎土で、焼成はあまり良くない。4は復元口径は約18cm高さは不明。内外面の調整は磨滅のため不明である。わずかに砂を含むが良質の胎土で、焼成はあまり良くない。

碗（6・7）6は復元口径は14cm、口縁部は外方に折れ、丸みを持った胴部に移る。外面の調整は磨滅のため不明であるが内面はヘラミガキで調整される。わずかに砂を含むが良質の胎土で、焼成はあまり良くない。7は1／3程の破片で、高台付碗である。高台部の底径は7.9cmで、外方に開く。高台部は貼付で、胴部と底部の接合部分より外方に大きく開く。内外面の調整は磨滅のため不明であるが、わずかに砂を含むが良質の胎土で、焼成はあまり良くない。

甕（12）復元口径は約14cm、口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸みをもつ。口縁から丸みを



第9図 SD01・02（1号・2号溝）出土石器実測図〔1/2〕



第10図 SD03（3号溝）出土須恵器・陶磁器実測図〔1/3〕

持った胴部に移る。内外面とも調整は磨滅のため不明である。砂を含むが良質の胎土で、焼成はあまり良くない。

黒色土器（9） 復元口径は14cm、口縁部は外方に開き、丸みを持った胴部から底部に移る。内外面とも黒色で調整は磨滅のため不明である。ほとんど砂を含まない良質の胎土で、焼成はあまり良くない。

SD02（第9図）

石器 わずかに黒曜石の剥片2点が出土したにすぎない。

黒曜石（2.5）

SD03（第10図）

須恵器（1） 小破片で甕と思われる。外面は浅い沈線が三条、内面は格子目タタキが残っている。焼成は良く青灰色を呈する。

陶磁器（2.3・4） 2は陶器で瓶の口縁部片である。胎土は灰褐色で外面は褐釉がかかり、内面は口縁部分のみ褐釉が施される。3は磁器で小碗片である。胎土は白色で口部より呉須で縦の文様が描かれる。灰白色の透明釉がかかる。4は磁器で碗片である。胎土は白色で内面に呉須で線の文様が描かれる。灰白色の透明釉がかかる。いずれも近代のものである。

5. まとめ

今回の発掘調査では3条の溝が発見されたが、いずれも大きく削平されていた。その内のSD01は上端幅4.3m～6.0mで、幅南西端で直角にまがる。また、溝内埋土の状態から、溝内側に土塁等の施設が存在していたものと考えられる。このような構造を持つものは古代から中世の居宅跡に多く見られることが知られている。

SD01の時期については、出土した土器の内、土師器皿、高台付碗、黒色土器が溝の時期と近いものと思われる。土器はいずれも10世紀代の範疇に入るものである。

前古賀・井手口遺跡周辺からこれまで古代から中世にかかる遺跡が数多く発見されている。遺跡の南東約400～500mにある宮ノ后遺跡から昭和61年に、微高地の外側を取り囲む、11世紀から12世紀の幅15m～20m、深さ1.0m～1.5mの溝や土壌が発見されており、同年に隣接するヒヤケ遺跡からも12世紀前後頃の掘立柱建物、大小26条の溝が発見されている。

このように、今回の調査成果によっても、この地域には古代後半から中世前半にかけての遺跡が広範囲に広がっていることが判明した。このため今後この地域は、考古学の成果を基に歴史的な解明が必要になってくるであろう。

図 版



図版1 前古賀・井手口遺跡発掘前（北から）



図版2 遺構面検出（東から）



図版3 遺構掘り下げ後全景（東から）



図版4 遺構面検出（西から）



図版5 遺構掘り下げ後全景（西から）



図版6 SD01 全景（北東から）



図版7 SD01 全景（南西から）



図版8 SD01 南西端コーナー部分（東から）



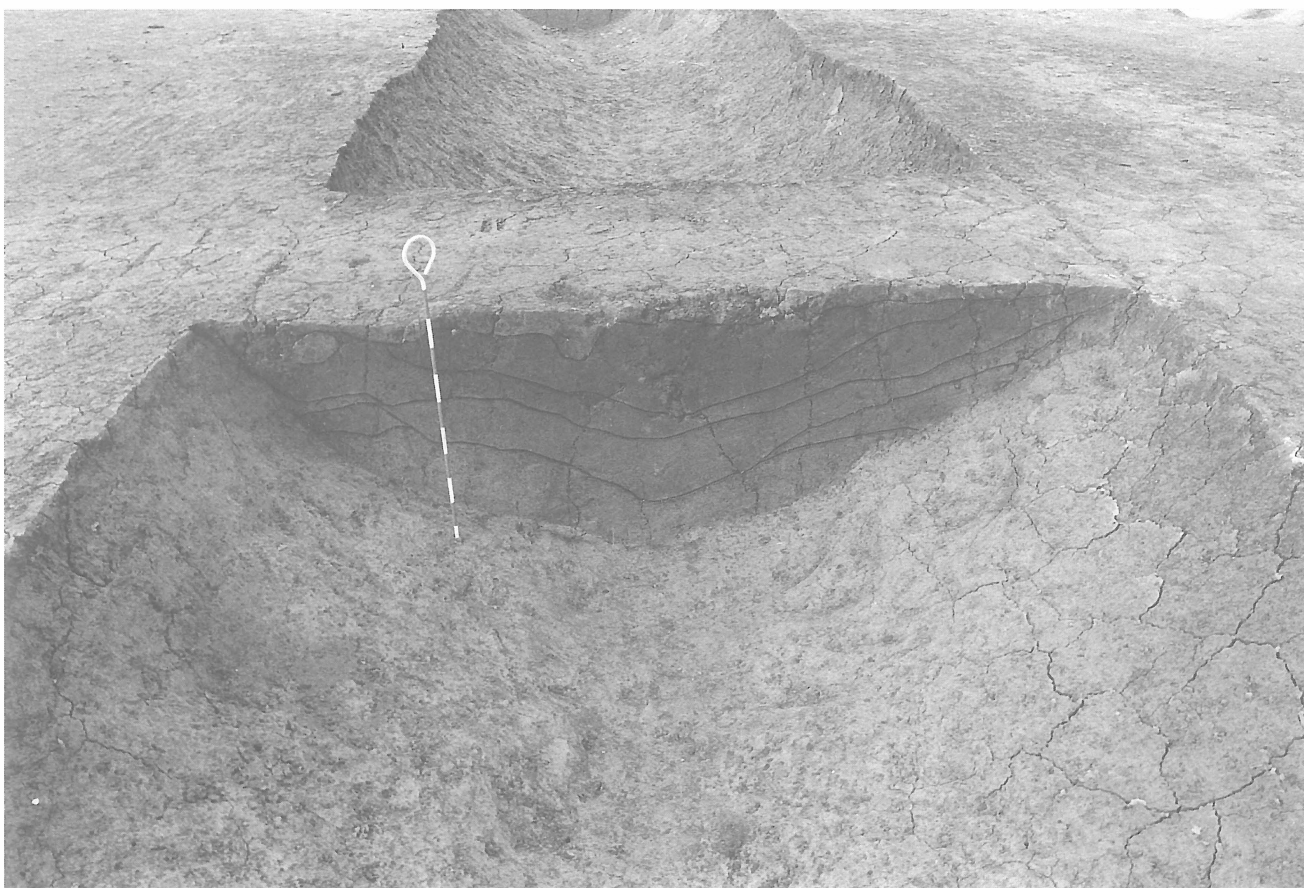
図版9 SD01 土器出土状態



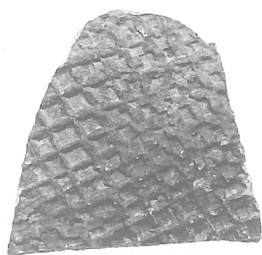
図版10 SD01 土層 (北から)



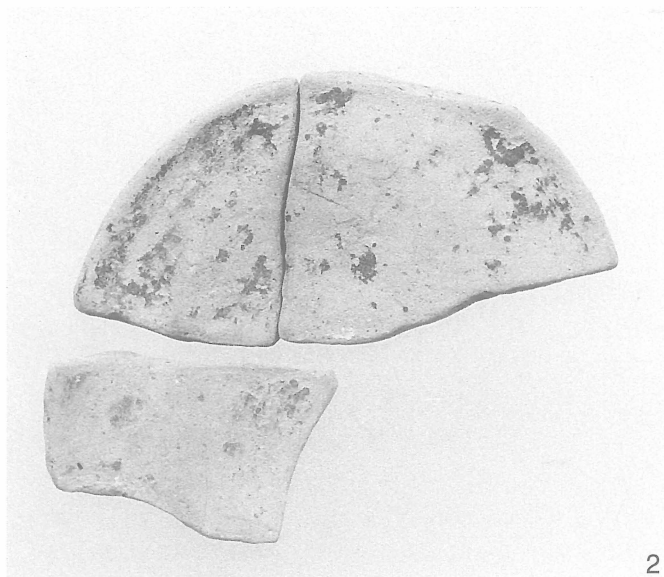
図版1 1 SD03全景（東から）



図版1 2 SD03土層（東から）



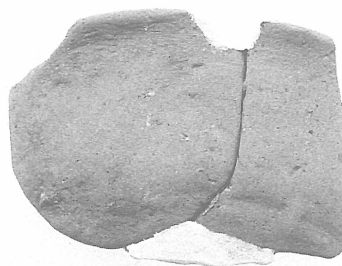
1



2



3



4

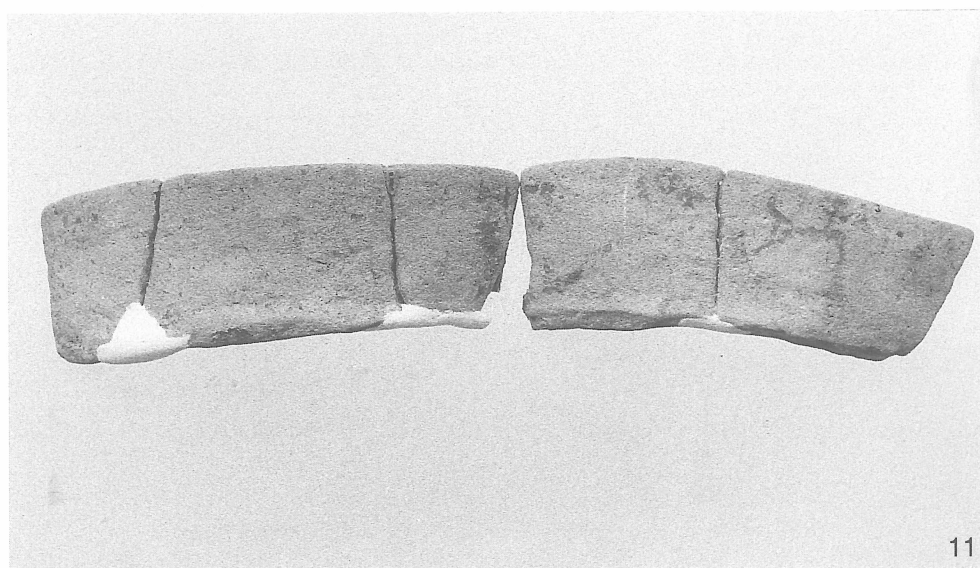
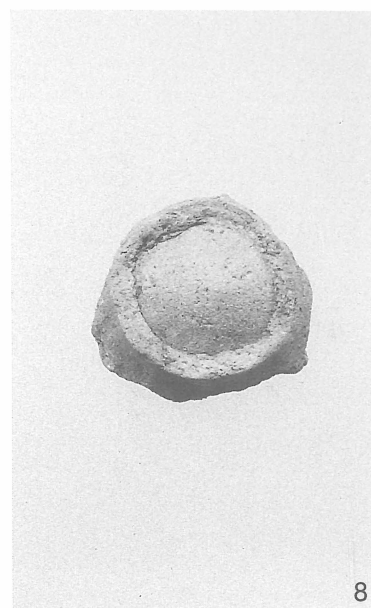


5

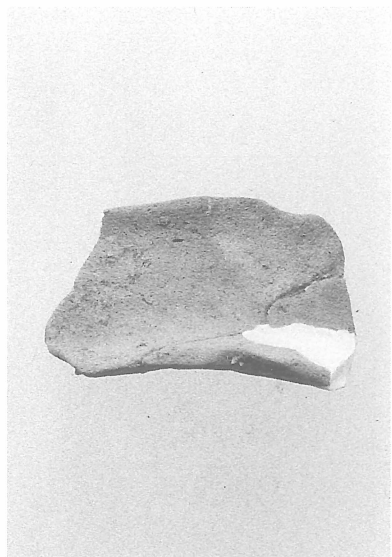


6

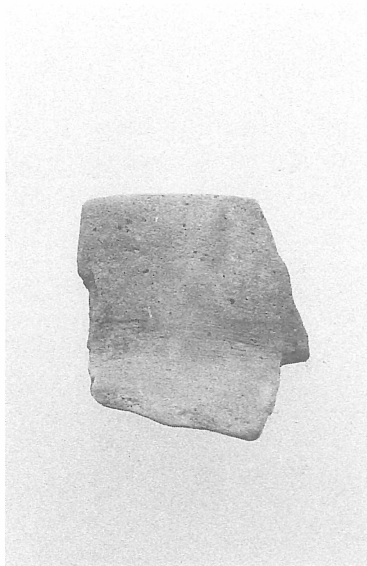
图版 13 SD01 (1号沟) 出土土器



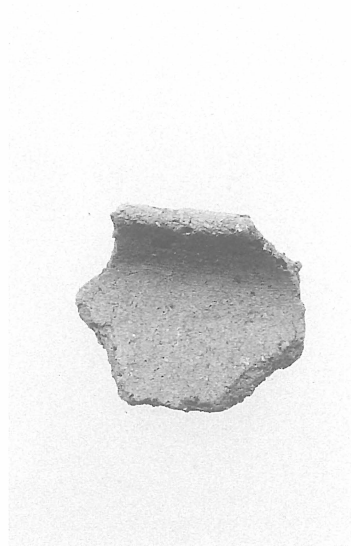
图版14 SD01 (1号沟) 出土土器



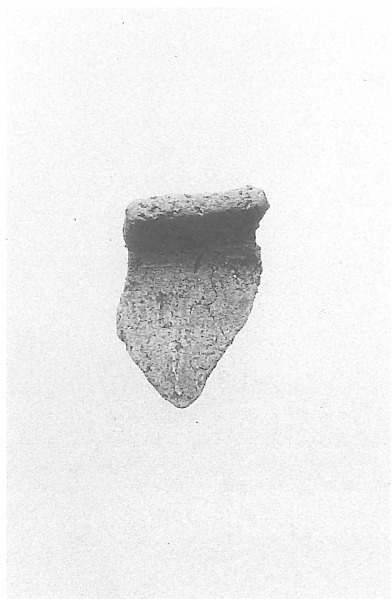
12



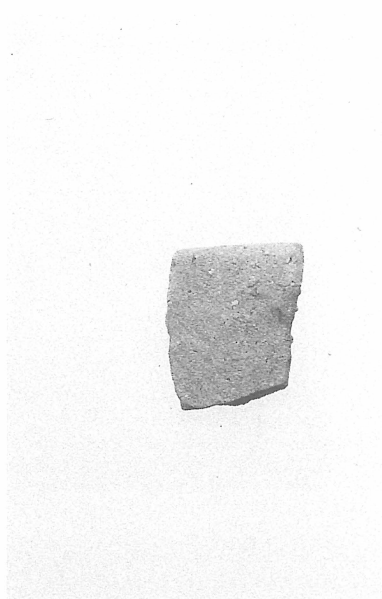
13



14



15

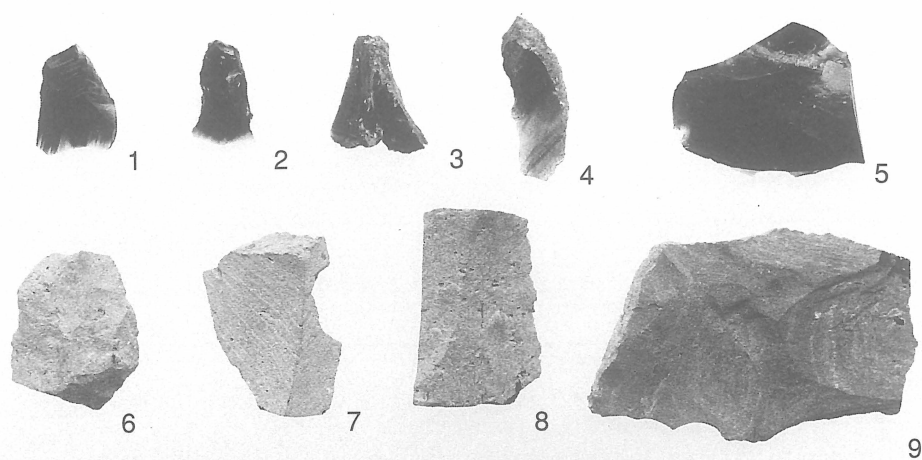


16

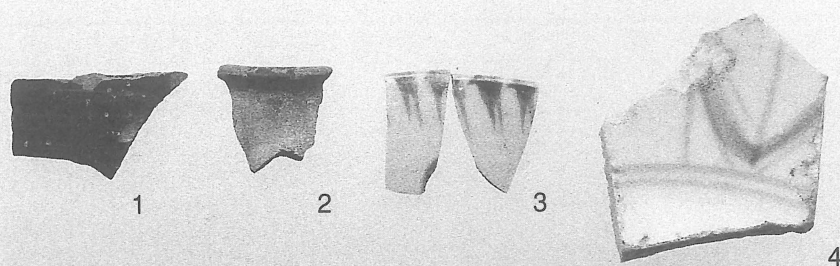


17

图版 15 SD01 (1号沟) 出土土器



图版16 SD01·02 (1·2号溝) 出土石器



图版17 SD03 (3号溝) 出土須恵器・陶磁器

報告書抄録

ふりがな		まえこが いでぐちいせき						
書名		前古賀・井手口遺跡						
副書名		福岡県八女市大字前古賀字井手口所在遺跡の調査報告						
巻次								
シリーズ名		八女市文化財調査報告書						
シリーズ番号		第 64 集						
編著者名		赤崎 敏 男						
編集機関		八女市教育委員会						
所在地		834-8585 福岡県八女市大字本町 6 4 7 TEL 0943-23-1111						
発行年月日		西暦 2001年3月30日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
まえこが 前古賀・ いでぐち 井手口遺跡	ふくおかけん 福岡県 やめし まえこが 八女市大字前古賀 いでぐち 字井手口	402109		33°11'50"	130°31'40"	2000. 10. 16 ～ 2000. 12. 11	900m ²	老人福祉 施設建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 跡		主 な 遺 物		特 記 事 項	
前古賀・ 井手口遺跡	居宅跡	歴史時代	溝 3		土師器 須恵器 石器			

前古賀・井手口遺跡

八女市文化財調査報告書
第 64 集

平成13年3月30日

発行 八女市教育委員会
八女市大字本町647
印刷 橋 爪 印 刷
八女市大字吉田1899-1